

## 長尾雨山が上海で開催した「古書画展覧雅集」について

About the old painting and calligraphy exhibition held by Uzan Nagao in Shanghai

松村 茂樹

大妻女子大学文学部

Shigeki Matsumura

Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：長尾雨山，上海，古書画展覧雅集，人脈形成力

Key words : Uzan Nagao, Shanghai, The old painting and calligraphy exhibition, Network formation ability

### 抄録

近代の漢学者・長尾雨山（1864-1942）は、1903年12月から1914年12月まで足かけ12年にわたり中国上海に滞在し、上海の文人たちと交わる中で、多くの文化的・社会的貢献を成した。今回とりあげる「古書画展覧雅集」の開催もその一つである。

本稿では、雨山が、中国初の古書画展覧会の可能性があるこの「雅集」を創始し、三次にわたる開催の後、そのすぐれた人脈形成力により、自らが選んだ中国人士を発起人に加え、日中協働の会に発展させるという貢献を成していたことを明らかにした。

### はじめに

近代の漢学者・長尾雨山（1864-1942）は、1903年12月から1914年12月まで足かけ12年にわたり中国上海に滞在し、上海の文人たちと交わる中で、多くの文化的・社会的貢献を成した<sup>[註1]</sup>。

とりわけ、乙巳（1905）中秋（旧暦8月15日、新暦9月13日）、上海徐園に詩詞壇耆宿と称された劉炳照（1847-1917）等中国人士6名を招いて催された徐園集が上海で初めての詩会（雨山の認識）となり、後の上海詩壇の原点となったことは特筆に値しよう<sup>[註2]</sup>。

ただ、雨山は詩会のみならず、「古書画展覧雅集」つまり古書画の展覧を行い、そこに集う人々の交流の場とする会を1907年秋、1908年春、同年秋の三次にわたって開催していた。これは中国初の古書画展覧会の可能性がある。

本稿は、雨山が上海で開催した「古書画展覧雅集」について考察するものである。幸いなことに、雨山旧蔵資料を整理分類した京都国立博物館寄託「長尾雨山関係資料」<sup>[註3]</sup>に関連資料が含まれており、長尾家および京都国立博物館でこの資料の整理にあたった呉孟晋氏（現京都大学人文科学研究

所准教授）の厚意により、拝見および写真使用が叶った。この考察により、近代上海における日中文化交流の重要な一断面を明らかにできるだろう。

### 1. 「古書画展覧雅集」

#### 「古書画展覧雅集」案内状

前出「長尾雨山関係資料」に「古書画展覧雅集」案内状（図1、図2）がある。写真を掲げると共に、翻字し、翻訳しておく（句読点は松村、以下同）。



図1 「古書画展覧雅集」案内状（裏）（京都国立博物館寄託）

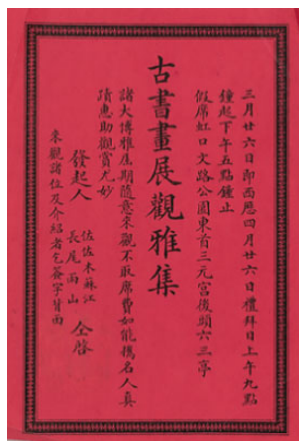


図2 「古書画展観雅集」案内状(表)(京都国立博物館寄託)

三月廿六日、即西曆四月廿六日、禮拜日、上午九點鐘起下午五點鐘止。

假席虹口文路公園東首三元宮後頭六三亭

古書畫展観雅集

諸大博雅、屆期隨意來觀。不取席費。如能攜名人真蹟觀、惠助觀賞尤妙。

發起人 佐佐木蘇江

長尾雨山 全啓

來觀諸位及介紹者、乞簽字背面。

〔(光緒三十四年)三月二十六日、西曆(一九〇八年)四月二十六日、日曜日、午前九時から午後五時まで。

虹口文路公園東首三元宮後頭の六三亭にて

古書画展観雅集

博雅の皆様、当日はご自由に来観ください。席料は不要です。名人の真跡を手にとってご覧いただければ、素晴らしい觀賞に資するところとなります。

發起人 佐々木蘇江

長尾雨山 同啓

來觀各位および紹介者は、裏面に署名をお願いします。〕

また、同様の紅紙に印刷された出品者への案内状(図3)も残されている。これも写真を掲げると共に、翻字し、翻訳しておく。

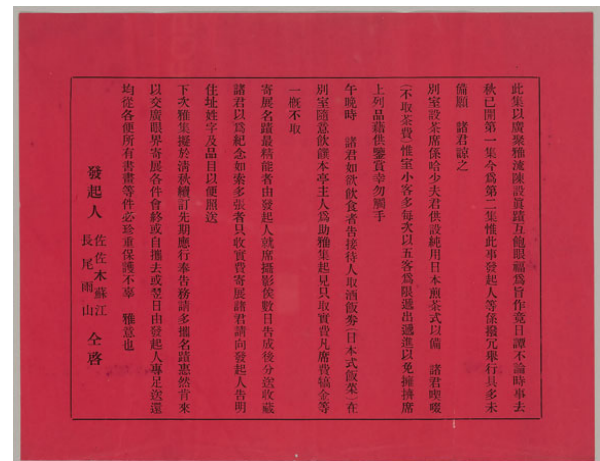


図3 「古書画展観雅集」出品者への案内状(京都国立博物館寄託)

此集以廣聚雅流、陳設真蹟互飽眼福爲旨、作竟日譚、不論時事。去秋已開第一集、今爲第二集、惟此事發起人等係撥冗舉行、具多未備、願 諸君諒之。

別室設茶席、係哈少夫君供設純用日本煎茶式以備 諸君喫啜(不取茶費)。惟室小客多、每次以五客爲限、遞出遞進、以免擁擠。席上列品藉供鑒賞、幸勿觸手。

午晚時 諸君如欲飲食者、告接待人取酒飲券(日本式飯菜)、在別室隨意飲饌。本亭主人爲助、雅集起見只取實費、凡席費犒金等一概不取。

寄展名蹟最精能者、由發起人就席攝影、俟數日告成後分送收藏諸君以紀念。如索多張者、只收實費。寄展諸君、請向發起人告明住址姓字及品目、以便照送。

下次雅集、擬於清秋續訂、先期應行奉告。務請多攜名蹟惠然肯來、以交廣眼界。寄展各件、會終或自攜去、或翌日由發起人專足送還、均從各便。所有書畫等件必珍重保護、不辜 雅意也。

發起人 佐佐木蘇江

長尾雨山 全啓

〔この雅集は広く文雅の士を集め、真跡を陳列して互いに眼福にあずかり、終日語り合うも、時事は論じないというものです。昨秋すでに「第一集」を開き、今回が「第二集」となります。ただこの会は發起人らがやりくりして挙げており、至らないところが多く、皆様のお許しを願います。

別室に茶席を設け、哈少夫君が純日本式の煎茶を用意して皆様の喫茶に供します(茶代はいた

だきません)。ただ部屋は小さく客が多いので、毎回五名に限り、入れ替えとし、混雑を避けたく存じます。席上の列品は鑑賞に供しますが、お手をお触れにならないようお願いいたします。

昼食夕食時に飲食されたい皆様は、接待係に酒飲券(日本料理)をお申し付けいただき、別室にてご自由にお召し上がりください。本亭(六三亭)主人の好意により、雅集ということで実費のみいただき、すべての席代祝儀などはいただきません。

展示にお寄せいただいた名跡で最も優れたものは、発起人が会場で撮影し、数日後にできあがりしましたら、収蔵者の皆様へ分けて送り記念いたします。もし多く必要なら、実費のみいただきます。展示にお寄せいただいた皆様、写真をお送りするため、発起人あて住所、姓字および品名をお知らせください。

次回の雅集は、深秋に行う予定で、事前にお知らせいたします。是非多く名跡を携えてお越しただきたく、視野を広めてくださいませ。展示にお寄せいただいた各件は、会終了後ご自身でお持ち帰りいただいても、翌日発起人が特に人をやってお返ししても、ご都合の良いようにいたします。すべての書画などは必ず大切に保護し、ご厚情に背きません。

発起人 佐々木蘇江

長尾雨山 同啓]

### 中国初の古書画展覧会の可能性

図2に見える「三月廿六日、即西曆四月廿六日」が光緒三十四(一九〇八)年であることは、中国歴史博物館編 勞祖徳整理『鄭孝胥日記』(1993. 10 中華書局)「光緒三十四年三月十九日(一九〇八年四月一九日)」の項に、「過金鞏伯、長尾雨山、示以拔可所寄沈石田、李龍眠二手卷、即留借作廿六日書畫展觀會之品〔金鞏伯(城)、長尾雨山を訪問し、(李)拔可が託するところの沈石田、李龍眠の二手卷を見せてもらう、これは二十六日の書画展観会の品として借りているものである〕」とあることからわかる。なお、後に満洲国國務総理大臣となる鄭孝胥(1860-1938)は、字を太夷といい、蘇戡と号した。福建閩侯の人。光緒八年(1882)の解元(郷試首席及第者)、1891年東京に赴任して副領事となり、同年12月12日に雨山と知り合う、1894年帰国、江南機器製造総局総弁などを歴任した後、1905年

上海に海蔵楼を築き、翌年商務印書館に入って雨山の同僚となった。

また、図3に「去秋已開第一集、今爲第二集〔昨秋すでに「第一集」を開き、今回が「第二集」となります〕」とあり、この1908年春に開かれた「古書画展観雅集」は「第二集」で、「第一集」は前年の1907年秋に開かれていたことがわかる。「第一集」の資料が残されていないのが惜しまれるが、「第一集」の際は案内状などの用意はされなかったのかもしれない。

1907年秋に「第一集」が行われた「古書画展観雅集」は、中国初の古書画展覧会の可能性がある。

《上海美術志》編纂委員会編『上海美術志』(2004. 12 上海書画出版社)「第二十二章 美術展覧」によると、中国で最も早く美術作品を陳列した展覧会は、清の宣統元年(1909)1月、蘇州教育會勸学所主催の各学堂成績展覧会(図画、課題作品、手工作品)であるという。また、王秀中「日本画壇：近代中国美術的中介和老師」<sup>[註4]</sup>は、1907年7月27日開催の「上海南陽橋対面茄勒路図画音楽専修学校成績展覧会」が史料に初めて見える展覧会であるとし、1908年4月27日(正しくは26日)に長尾雨山が佐々木蘇江と共に六三亭で挙行した「古書画展観会」(「古書画展観雅集」第二集のこと、同文では第一集は認識されていない)が金石書画蔵品展覧会の始まりであるという。このような先行研究からも、1907年秋開催の「古書画展観雅集」第一集は中国初の古書画展覧会の可能性が高い。

### 発起人および招待者と出品者

図2に見える第二集の会場となった六三亭は、長崎出身の白石六三郎(1868-1934)が1900年頃、当時日本租界であった上海文路二六四に開いた日本料亭で、白石が1907年、租界外江湾路に開業した六三花園、略称六三園の本店であった<sup>[註5]</sup>。

また、雨山と共に発起人となった佐々木蘇江(1869-1919)は、名を金次郎といい、秋田由利の人。1901年東京帝国大学医学部を卒業し、同年上海に赴き南潯路の常盤舎内で診療を開始、同年武昌路仁德里五五四号の綿貫医院跡に佐々木医院を開設し、1905年北蘇州路三七号に移り、1908年黄浦路四二～四四号の旧オーストリア領事館跡に移り、後に靶子路二七号に移り、最後は老靶子路一三一号の滬寧鉄道病院跡に移って終わる。佐々木は1919年に東京で歿し、佐々木医院は1920年頓宮寛(1884

-1974) に引き継がれ, 1924 年北四川路一四二号に移り, 後に東洋一の個人総合病院と称される福民病院となった<sup>[注6]</sup>.

図1は, 横8.5 cm, 縦12.3 cmの紅紙に印刷されており, 来観者または紹介者の名前を裏面に記すことになっていた。「長尾雨山関係資料」には, 雨山が裏面に各々「吳志南先生」「陸煒士先生」「吳翊亭先生」「余映堂先生」「杜亜泉先生」と毛筆で書き, 「雨山」白文印を押したものが残されている(押印のみのものも1枚ある)。以下に, これらの人物を紹介しておく。

吳志南, 未詳。

陸煒士(1862-1935)は, 名を爾奎, 字を浦憲といい, 煒士と号した。江蘇武進の人。挙人となり天津北洋学堂, 上海南洋公学で教えた後, 1906年商務印書館に入り, 1908年新設された辞典部の部長として『辞源』を主編し, 両目を失明するほどこれに打ち込み, 1915年完成, 中国初の近代的辞書編纂者となった。

吳翊亭(1852-1929)は, 名を曾祺, 字を翼亭また翊庭といい, 人は涵芬先生と称した。福建侯官(福州)の人。光緒二年(1876)の挙人で, 全閩師範学堂教務長などを歴任した後, 商務印書館に入り, 涵芬楼図書館(後の東方図書館)創設に尽力した。なお, 雨山は「吳翊亭」と表記しているが, 字の「翼亭」「翊庭」を混同したか, またはこの表記も行われていたのかのどちらかと思われる。

余映堂, 未詳。

杜亜泉(1873-1933)は, 原名を煒孫, 字を秋帆といい, 亜泉と号した。浙江会稽(紹興)の人。十六歳で秀才となり, 崇文書院に学ぶ。1900年上海に出て, 中国最初の私立科学技術大学である亜泉学館を設立, 1904年商務印書館編訳所理化部主任となり, 『東方雑誌』を主編した。

また, 「古書画展観雅集」第二集を報道した『時報』「雑紀」の切り抜き(雨山が「四月廿七日 時報」と書き入れている)(図4)も残されている。

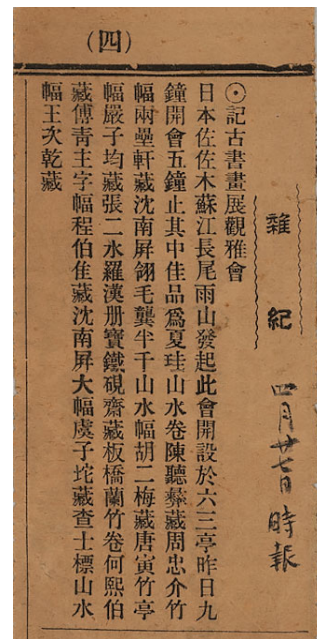


図4 1908年4月27日付『時報』(京都国立博物館寄託)

#### ○記古書畫展観雅會

日本佐佐木蘇江, 長尾雨山發起此會開設於六三亭。昨日九鐘開會, 五鐘止。其中佳品, 爲夏珪山水卷陳聽彝藏, 周忠介竹幅兩壘軒藏, 沈南屏翎毛・龔半千山水幅胡二梅藏, 唐寅竹亭幅嚴子均藏, 張二水羅漢冊寶鐵硯齋藏, 板橋蘭竹卷何熙伯藏, 傅青主字幅程伯佳藏, 沈南屏大幅虞子坨藏, 查士標山水幅王次乾藏。

#### [○古書画展観雅會を記す]

日本の佐々木蘇江, 長尾雨山の發起になるこの会が六三亭で開催された。昨日の九時開会, 五時に終わる。その中の佳品は, 「夏珪山水卷」陳(程)聽彝藏, 「周忠介竹幅」兩壘軒藏, 「沈南屏(蘋)翎毛」・龔半千「山水幅」胡二梅藏, 「唐寅竹亭幅」嚴子均藏, 「張二水羅漢冊」寶鉄硯齋藏, 「板橋蘭竹卷」何熙伯藏, 「傅青主字幅」程伯佳(佳)藏, 「沈南屏(蘋)大幅」虞子坨藏, 「查士標山水幅」王次乾藏である。]

これより, 多くの收藏家から借りた古書画の名品が展示されていたことがわかる。これに前出『鄭孝胥日記』に見える李拔可藏の沈石田(周), 李龍眠(公麟)の二手巻も加わっていたはずである。これら收藏家を紹介しておく。

程聽彝(1867-?)は, 名を祖福, 字を聽彝とい

い、容孫と号した。浙江錢塘（杭州）の人。光緒十四年（1888）の挙人で、官は福州知府に至る。辛亥革命後、章炳麟らが発起した中華民国連合会に参加した。絵画を善くし、鑑賞に長じた。なお、『時報』紙面に「陳聽彝」とあるのは誤植と思われる。

両豊軒は、呉雲（1811-1883）の室号。呉雲は、字を少青といい、平齋と号した。安徽休寧の人、浙江帰安（湖州）に住む。収集家。ただし、この1908年には呉雲はすでに歿しているため、その後人ということになる。

胡二梅（?-1915）は、名を琪、字を二梅といい、二梅と号した。安徽桐城の人。画家で『蘇報』を創刊した胡鉄梅（1848-1899）の弟。ちなみに、兄の胡鉄梅は日本遊学経験があり、日本人の生駒悦を妻としている。

嚴子均（1872-1931）は、義彬と号した。浙江慈溪の人。1907年、父の嚴信厚（1838-1906）から事業を受け継ぎ、上海に源吉、徳源という二つの錢莊（両替商）を開設している。

宝鉄硯齋は、図3に見える哈少夫（1856-1934）の室号。哈少夫は、名を麀、字を少夫また少甫といい、觀叟と号した。江蘇南京の人。回族（イスラム教を信仰する中国少数民族）。上海書画研究会協理、海上題襟館金石書画会副会長、西泠印社社長などを務めた。

何熙伯（?-1923 一作1921）は、名を汝穆、字を熙伯といい、洗鉢と号した。浙江の人、また安徽の人ともいう。上海に寄居し、画を鬻いだ。

程伯佳（佳）、未詳。後出程松卿の別名と思われる。

虞子垞は、虞洽卿（1867-1945）の別名と思われる。虞洽卿は、名を和徳といい、洽卿と字した。浙江鎮海の人。十五歳で上海に出て、店員から身を起こして荷蘭銀行買弁となり、1906年、日本に赴き、大隈重信らの面識を得た。辛亥革命後は、上海總商會會長などをつとめ、中国同盟会や中国国民党に資金援助を行った。

王次乾、未詳。

李拔可（1876-1953）は、名を宣龔、字を拔可といい、墨巢と号した。福建閩県（福州）の人。光緒二十年（1894）の挙人で、官は江蘇候補知府に至る。商務印書館に入り、經理（取締役）を長く務めた。

ここで注目すべきは、1908年の時点で、雨山が上海の書画収集家および商務印書館関係者そして在上海在留邦人と確固たる人脈を築いていたことで

ある。この人脈の助力により、「古書画展観雅集」は開催できたのである。なお、雨山は佐々木蘇江をもう一人の発起人として立てているが、この手法は、雨山が上海で興した詩会でも受け継がれ、さらには帰国後、京都で始めた寿蘇会でも同様に富岡鉄齋の息子である富岡謙蔵と共に主催している。

## 2. 第三次古書画展観雅集

### 賛同人を設ける

雨山は、1908年秋に「第三次古書画展観雅集」を開催している。この案内状（図5）も前出「長尾雨山関係資料」にあるので、写真を掲げると共に、翻字し、翻訳しておく。

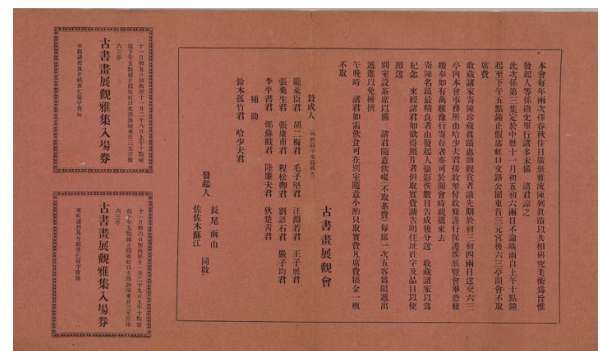


図5 「第三次古書画展観雅集」案内状（京都国立博物館寄託）

本會毎年兩次、擇春秋佳日、廣聚雅流、陳列真蹟、以共相研究美術爲旨。惟發起人等係撥冗舉行、具多未備、諸君諒之。

此次係第三集、定於中歷十一月初五初六兩日、不論晴雨、自上午十點鐘起至下午五點鐘止、假席虹口文路公園東首三元宮後六三亭開會、不取席費。收藏諸家寄陳珍藏真蹟惠助觀賞者、請先期於初三初四兩日、送交六三亭內本會事務所、由哈少夫君接收單付收條。謹行保護俟展覽會畢、憑條繳奉。如有萬難豫行寄存者、亦可於開會時親攜來去。寄陳名蹟最精良者、由發起人攝影、俟數日告成後分送收藏諸家、以爲紀念。來觀諸君欲得照片者、但取實費。請告明住址姓名及品目、以便照送。別室設茶席、以備諸君隨意飲啜（不取茶費）。每席一次五客爲限、遞出遞進、以免擁擠。午晚時諸君如需飲食、可在別室隨意小酌。只取實費、凡席費犒金一概不取。

古書畫展覽會

賛成人 (列姓以平水韻爲去)  
 龐萊臣君 胡二梅君 毛子堅君 汪淵若君 王  
 子展君  
 張菊生君 張康甫君 程松卿君 劉語石君 嚴  
 子均君  
 李平書君 鄭蘇戡君 陸廉夫君 狄楚青君  
 補助  
 鈴木孤竹君 哈少夫君  
 發起人 長尾雨山  
 佐佐木蘇江 同啓

[本会は毎年二回、春秋の佳日を選んで、広く文雅の士を集め、真跡を陳列して、共に美術を研究しようとするものです。ただ發起人らがやりくりして挙げており、至らないところが多く、皆様のお許しを願います。

今回は「第三集」で、中曆(光緒三十四年)十一月五日、六日(西曆一九〇八年十一月二十八日、二十九日)の両日、天候に関わらず、午前十時から午後五時まで、虹口文路公園東首三元宮後頭の六三亭にて開催し、席料は不要です。

收藏家の皆様で珍蔵の真跡を展示に寄せて觀賞に供していただける方は、あらかじめ三日、四日の両日、六三亭内の本会事務所に届け、哈少夫君より受領証をお受け取りください。謹んで展覽会が終わるまで保護し、受領証と引き換えにお返しいたします。もしあらかじめ預けることが難しい方は、開会時に自らお持ちくださってもかまいません。

展示にお寄せいただいた名跡で最も優れたものは、發起人が会場で撮影し、数日後にできあがりましたら、收藏者の皆様へ分けて送り記念いたします。来館者の皆様で写真をご入用の方は、実費のみいただきます。写真をお送りするため、住所、姓字および品名をお知らせください。別室に茶席を設け、皆様のご自由にお飲みになれるようにいたします(茶代はいただきません)。毎回五名に限り、入れ替えとし、混雑を避けたく存じます。

昼食夕食時に飲食されたい皆様は、別室にてご自由にお召し上がりください。実費のみいただきます。

古書画展観会

賛同人(平水韻順)

龐萊臣君 胡二梅君 毛子堅君 汪淵若君 王

子展君  
 張菊生君 張康甫君 程松卿君 劉語石君 嚴  
 子均君  
 李平書君 鄭蘇戡君 陸廉夫君 狄楚青君  
 補助  
 鈴木孤竹君 哈少夫君  
 發起人 長尾雨山  
 佐々木蘇江 同啓

### 賛同人への案内状

また、賛同人への案内状(図6)も残されている。これも写真を掲げると共に、翻字し、翻訳しておく。

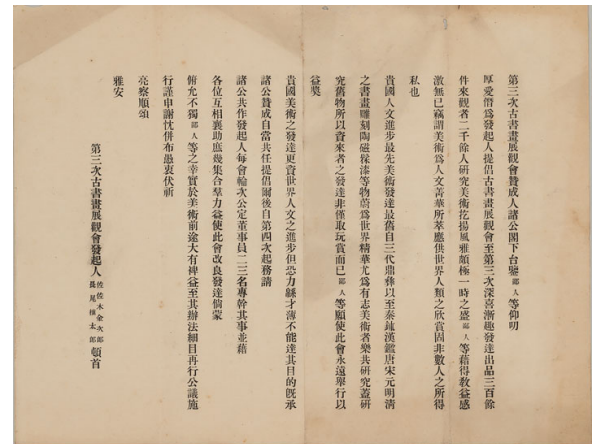


図6「第三次古書画展観雅集」賛同人への案内状

第三次古書畫展觀會贊成人諸公閣下台鑒。鄙人等仰叨  
 厚愛，僭爲發起人提倡古書畫展觀會，至第三次。深喜漸趣發達，出品三百餘件，來觀者二千餘人，研究美術，挖楊風雅，頗極一時之盛。鄙人等藉得教益，感激無已。竊謂美術爲人文菁華所萃，應供世界人類之欣賞，固非數人之所得私也。貴國，人文進步最先，美術發達最舊。自三代鼎彝以至秦鉢，漢鑑，唐宋元明清之書畫，雕刻，陶磁，髹漆等物，蔚爲世界精華。尤爲有志美術者樂共研究，蓋研究舊物所以資來者之發達，非僅取玩賞而已。鄙人等願使此會永遠舉行，以益獎貴國美術之發達，更資世界人文之進步。但恐力絀才薄，不能達其目的，既承諸公贊成，自當共任，提倡爾後自第四次起，務請諸公共作發起人，每會輪次，公定董事員二三名，

専幹其事. 並藉  
各位互相襄助, 庶幾集合羣力, 益使此會改良發達.  
倘蒙  
俯允, 不獨鄙人等之幸, 實於美術前途大有裨益.  
至其辦法細目, 再行公議施行. 謹申謝忱, 併布愚  
衷, 伏祈  
亮察. 順頌  
雅安  
第三次古書畫展觀會發起人 佐佐木金次郎  
長尾慎太郎 頓首

[第三次古書畫展觀會贊同人諸公閣下台鑑. 小生  
等

お蔭をもちまして, 僭越ながら發起人として古  
書畫展觀會を提唱し, 第三次に至りました. 次第  
に発展して出品三百余件, 来觀者二千余人とな  
り, 美術を研究し, 風雅を称揚して, 頗る一時の  
盛を極めたこと, 深く喜びとするところです. 小  
生等は教益をいただき, 感激尽きることがあり  
ません. 美術は人文の精華を集めたもので, 世界  
人類の觀賞に供すべきであり, もとより数人が  
私するところではないと思う次第です.

貴国では, 人文は最も早くから進歩し, 美術は最  
も古くから發達しています. 三代の鼎彝さらには  
秦の璽印, 漢の古鏡, 唐宋元明清の書畫, 彫刻,  
陶磁, 漆器等に至るまで, 世界の精華として盛觀  
をなしています. とりわけ美術を志す者が楽し  
んで研究を共にしているのは, 文物の研究が将  
来の発展に資するところがあるためで, ただ賞  
玩しているだけではないからであります. 小生等  
はこの會が永遠に舉行され, ますます  
貴国美術の發達を奨め, さらには世界人文の進  
歩に資したいと願っております. ただおそらく  
浅学非才の身では, その目的を達することはで  
きず, すでに皆様の賛成を承って, 共に任に当  
たるようになっておりますが, 以後第四次より, 諸  
公に共に發起人となつていただき, 毎會, 役員二  
三名を公に定め, 専らこの職務に当たってもら  
いたく存じます. 併せて

各位の相互協力により, 衆知をお集めいただき,  
さらにこの會を改良發展させてくださることを  
願います. もし

ご了承をいただけますれば, 小生等の幸いのみ  
ならず, 誠に美術の前途において大いなる裨益  
になることと存じます. その規則細目は改めて

公議にかけて施行いたします. 謹んで感謝申し  
上げ, 併せて心より申し述べます. 伏して  
ご諒察を願ひ上げ, ついでながら  
ご安寧をお祈り申し上げます.

第三次古書畫展觀會發起人 佐々木金次郎  
長尾慎太郎 頓首]

### 中国人士と共に

この「第三次古書畫展觀會」(第三次では「展觀  
會」と称している. ただし案内書に付せられた入場  
券には「雅集」とある)では, 發起人の他に贊同人  
と補助が設けられている. 既出以外の人々を紹介  
しておく.

龐萊臣(1864-1949)は, 名を元濟, 字を萊臣とい  
い, 虚齋と号した. 浙江烏程の人. 上海に出て龍章  
造紙廠などの会社を興し, 浙江民族工業の開拓者  
と称された. 書畫の收藏に富み, その旧藏品は世界  
各地の有名博物館, 美術館に蔵されている.

毛子堅(生卒年未詳)は, 名を経疇といい, 子堅  
と字した. 原籍は蘇州, 上海の人. 清末の秀才. 上海  
の自治に務め, 救火聯合會會長などに任じた. 吟詠  
に長じ, 鳴社を主宰した. また收藏に富み, 鑑別を  
善くした.

汪淵若(1846-1915)は, 名を洵, 字を子淵とい  
い, 淵若と号した. 江蘇陽湖(武進)の人. 光緒十八年  
(1892)の進士で, 翰林院編修を授けられた. 詩文  
書畫にすぐれ, 海上題襟館金石書畫會の初代會長  
をつとめた.

王子展(1849-1916)は, 名を存善といい, 子展と  
字した. 浙江杭州の人. 光緒二十六年(1900)に上  
海に出て, 財政管理に長じたことから盛宣懷の信  
任を得て, 漢冶萍公司董事等に任じた. 蔵書二十余  
万卷を誇り, 碑版の收藏にも富んだ.

張菊生(1867-1959)は, 名を元濟, 字を筱齋とい  
い, 菊生と号した. 浙江海塩の人. 光緒十八年  
(1892)の進士で, 翰林院庶吉士を授けられ  
た. 1902年商務印書館に入って編訳所所長となり,  
以後中心的役割を担った. 『四部叢刊』『百衲本二  
十四史』などを世に送り, 東方図書館を創建するな  
ど, その貢献は大きい.

張康甫(1867-1945)は, 字を錫藩, 康侯とい  
い, 狎鷗道人と号した. 浙江普陀の人. 光緒の秀才. 清  
末に上海に出て『新聞報』の編輯となり, 後に総編  
を務めた. 書畫を工にし, 遺墨が多く残されてい  
る.

程松卿（？-1918）は、浙江湖州の人。養蚕業に詳しく、上海に出て生糸検査員亨徳（W. E. Hunt）の助手を五年務めて生糸仲買人となる。1905年フランスの永興洋行売弁となり、生糸および廢糸の業務を歿年まで担当した。

劉語石（1847-1917）は、名を炳照、字を伯蔭また光珊といい、語石と号した。江蘇陽湖（武進）の人。清末の秀才で、官は候選訓導。詩詞を善くし、1905年雨山主催の徐園集に主客として参加し、上海詩壇の創始に貢献した。

李平書（1854-1927）は、名を鍾珏、字を平書といい、瑟齋、且頑と号した。祖籍は蘇州、江蘇宝山（上海）の人。清末の優貢で、広東遂溪知県等に任ずる。1903年江南製造局提調となり、後に中国通商銀行、招商局、江蘇鉄路局等の要職を務めた。

陸廉夫（1851-1920）は、名を恢、字を廉夫といい、狷叟と号した。江蘇吳江の人。蘇州に寄寓した。清末の秀才。吳大澂の幕下に入り、山海関に従軍した。晩年は上海に住み、絵画に潜心した。

狄楚青（1873-1941）は、名を葆賢、字を楚青といい、平子と号した。江蘇溧陽の人。清末の挙人。戊戌変法に参加し、失敗後、日本に留学した。1904年上海で『時報』を創刊し、有正書局を創始した。

鈴木孤竹、未詳。室名は画禅廬。

これらの賛同人は、当時の上海実業界、文化界の有力者ばかりで、雨山の豊富な人脈に驚かされる。ちなみに、賛同人を依頼された鄭孝胥（蘇戡）は、前出『鄭孝胥日記』「光緒三十四年九月十七日（一九〇八年一〇月一日）」の項に、「長尾雨山來約爲書畫會贊成人、許之〔長尾雨山が来て書画會賛同人に誘うので、承諾した〕」と記している。

さらに、この「第三次古書画展覧會」を報道した『時報』「雜紀」の切り抜き（雨山が「十月初三日時報」と書き入れている）（図7）も残されている。

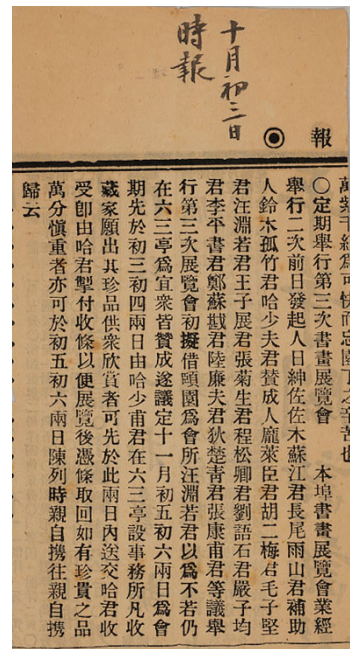


図7 1908年10月3日付『時報』（京都国立博物館寄託）

#### ○定期舉行第三次書畫展覽會

本埠書畫展覽會，業經舉行二次。前日，發起人日紳佐佐木蘇江君，長尾雨山君，補助人鈴木孤竹君，哈少夫君，贊成人，龐萊臣君，胡二梅君，毛子堅君，汪淵若君，王子展君，張菊生君，程松卿君，劉語石君，嚴子均君，李平書君，鄭蘇戡君，陸廉夫君，狄楚青君，張康甫君等議舉行三次展覽會。初擬借頤園爲會所，汪淵若君以爲不若仍在六三亭爲宜，衆皆贊成，遂議定十一月初五初六兩日爲會期。先於初三初四兩日由哈少甫君在六三亭設事務所，凡收藏家願出其珍品供衆欣賞者，可先於此兩日內送交哈君，收受即由哈君掣付收條，以便展覽後，憑條收回。如有珍品之品，萬分慎重，亦可於初五初六兩日陳列時，親自携往親自携歸去。

#### 〔○第三次書画展覧會が定期開催される〕

本市では書画展覽會がすでに二回開催されており、前日、發起人の日本名士佐佐木蘇江君、長尾雨山君、補助人の鈴木孤竹君、哈少夫君、賛同人の、龐萊臣君、胡二梅君、毛子堅君、汪淵若君、王子展君、張菊生君、程松卿君、劉語石君、嚴子均君、李平書君、鄭蘇戡君、陸廉夫君、狄楚青君、張康甫君等が議して三次展覽會を開催した。当初は頤園を借りて会場とする計画であったが、汪淵若君がやはり六三亭が良いとし、皆が賛成して、十一月五日、六日の両日を会期と定めた。まず三日、



四日の両日に哈少甫君が六三亭に事務所を設ける。すべての收藏家で貴重な蔵品を多くの鑑賞に供したい者は、まずこの両日以内に哈君に届け、哈君より受領証を受け取り、展覧後、これと引き換えに戻してもらう。貴重な作品や、十分に慎重を期したい場合は、五日、六日両日の陳列時に、自ら持ち込み自ら持ち帰ってもかまわない。]

これによると、当初は頤園で開催する計画であったが、汪淵若が六三亭での開催を主張したとあり、汪淵若の統率力が発揮されていたことがわかる。前述のように、汪淵若は進士出身の文人で、詩文書画にすぐれ、海上題襟館金石書画会会長をつとめており、雨山が劉語石等を招いて開催した徐園集の後継持ち回り詩会にも参加している<sup>[註7]</sup>。

雨山は図6で、これら汪淵若を中心とする賛同人に、次の第四次から共に発起人となるよう求めている。かくして、この会は、以後「中国金石書画賽会」と名称を改め、1909年1月28日付『時報』に「中国金石書畫賽會章程」が発表されている。また、同年2月23日付『時報』に、2月20日～26日静安寺路愚園内で開催された「中国金石書畫賽會廣告」記事が、同年10月17日付『時報』に、11月2日～8日（非売品展示）、11月9日～15日（売品展示）張園で開催された「中国金石書畫第二次賽會廣告」記事が掲載されており、その発展ぶりが窺える。

### 新たな方向性を示す

ここで注目すべきは、雨山が図5・図6で「美術」という語を使い、図6では「三代の鼎彝さらには秦の璽印、漢の古鏡、唐宋元明清の書画、彫刻、陶磁、漆器等」を「美術」の範疇にあるものとしている点である。そして、「とりわけ美術を志す者が楽しんで研究を共にしているのは、文物の研究が将来の発展に資するところがあるためで、ただ賞玩しているだけではないからでありましょう」と、「美術」を前向きな「研究」の対象とする論理を展開している。このような論理が、中国「美術」界に新たな方向性を示したであろうことは想像に難くない。

雨山は、中国の「美術」の未来を託す人々として、これらの賛同人を選び、共に発起人となることを求めた。「長尾雨山関係資料」に、雨山が賛同人の氏名を列記した草稿(図8)があるので、写真を掲載しておこう。雨山はこの冒頭に、

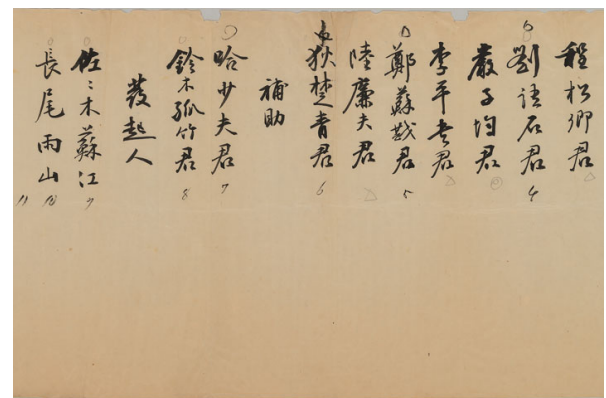
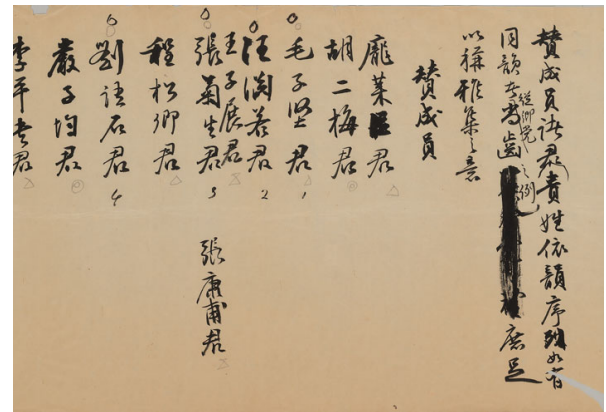


図8 長尾雨山「第三次古書画展觀雅集」賛同人名簿草稿(京都国立博物館寄託)

賛成員諸君（貴姓依韻序列，如有同韻者，從鄉党尚齒之例）。庶足以稱雅集之意。

[賛同人諸君（姓の韻の順とし，同韻の者があれば，年齢順とする）。すべての人が十分に雅集の意にかなっている。]

と記しており、まるで空海の「灌頂記」を見るかのような率意の書法に、雨山の人選の満足感が窺える。

### おわりに

長尾雨山が成した文化的、社会的貢献は数多いが、本稿により、中国初の可能性がある古書画展覧会を創始し、自らが選んだ中国人士を発起人に加え、日中協働の会に発展させていたことを明らかにできた。

この貢献の背後には、雨山のすぐれた人脈形成力があつたといわねばならない。ここに挙げた図

2・図3・図5・図6の文章は、相手に対する尊重と思いやりに溢れている。このような雨山人柄が、人脈形成につながり、大きな貢献を成し得たのであろう。

## 注

[注1] 長尾雨山は、通称を楨太郎、名を甲、字を子生といい、雨山、石隠、无悶と号した。讃岐高松の人。東京大学古典講習科を卒業後、学習院教師を経て文部省専門学務局に勤務し、岡倉天心の依頼により東京美術学校に兼勤した後、熊本の第五高等学校教授となり、同僚となった夏目漱石の漢詩を添削している。次いで、東京高等師範学校教授・東京帝国大学文科大学講師となるが、いわゆる教科書疑獄事件にまきこまれ、無実の罪で東京高師を退職、1903年12月、上海に渡り、商務印書館に勤務した。商務印書館では、主に教科書編纂にあたり、日本のノウハウを中国に伝え、『最新国文教科書』『共和国教科書』などを校訂した。また、劉炳照と共に上海で詩会を興し、その中で知り合った呉昌碩に金石学に基づいた当時最新の文人趣味を学び、呉昌碩の紹介で西泠印社社友にもなった。さらには、岡倉天心の委嘱でボストン美術館鑑査委員となり、呉昌碩揮毫の扁額を同美術館に贈るなどして高度な日中米文化交流を現出した。1914年12月、上海在住足かけ12年、実質11年で帰国し、京都に寄寓、上海時代の詩会を継修した寿蘇会、赤壁会を主催し、そこに集う人々を「書画文墨趣味ネットワーク」で繋いだ。

なお、雨山に関する基礎研究に、杉村邦彦「有関長尾雨山的研究資料及其韻事若干」〔中文〕（『西泠印社九十周年論文集・印学論談』1993.10 西泠印社出版社 所収）、同「長尾雨山とその交友」第1～15回（『墨』第26～129号 1995.10.1～1998.2.1 芸術新聞社 所収）が、雨山と教科書疑獄事件に関する研究に、樽本照雄『清末小説閑談』（1983.9.20 法律文化社）、同『初期商務印書館研究 増補版』（2004.5.1 清末小説研究会）がある。

また、筆者による雨山関連研究に、『漱石全集』の装幀から一漱石と呉昌碩そして長尾雨山一（『漱石研究』9号 1997.11.20 翰林書房）、『呉昌碩研究』（2009.2.27 研文出版）、「書画文墨趣味のネットワーク」（『アジア遊学』146「民国期美術へのまなざし」2011.10.20 勉誠出版）、「呉昌碩が日本にもたらしたもの—河井荃廬・長尾雨山を介

しての伝播」（『アジア遊学』168「近代中国美術の胎動」2013.11 勉誠出版）、「長尾雨山と呉昌碩」（『中国文化』第72号 2014.6.28 中国化学会）、「長尾雨山が上海で参加した詩会について」（『日本中国学会報』第66集 2014.10.11 日本中国学会）、「長尾雨山之印学〔中文〕」（『第四届“孤山証印”西泠印社国際印学峰会論文集』2014.10 西泠印社出版社）、「大妻女子大学蔵「犬養木堂・羅振玉・長尾雨山等書画帖」について」（『大妻女子大学紀要-文系-』第47号 2015.3.20 大妻女子大学）、「呉昌碩と長尾雨山の上海愛而近路の旧居について」（『大妻女子大学紀要-文系-』第49号 2017.3.20 大妻女子大学）、「近代のボストン美術館に見る日中米文化交流について—岡倉天心、長尾雨山そして呉昌碩の貢献—」（『人間生活文化研究』NO.27 2017.9.11 大妻女子大学人間生活文化研究所）、「長尾雨山と呉昌碩交誼の原点—漢長生未央埽及其題詩〔中文〕」（『第五届“孤山証印”西泠印社国際印学峰会論文集』2017.10 西泠印社出版社）、「長尾雨山の旧宅址を訪ねて—京都室町通と西洞院通での実地踏査報告—」（『コミュニケーション文化論集』第16号 2018.3.22 大妻女子大学コミュニケーション文化学会）、「長尾雨山と依水園」（『中国文化』第77号 2019.6.29 中国化学会）、「呉昌碩と日本人士」（2019.7.5「Otsuma eBook」大妻女子大学人間生活文化研究所）、「長尾雨山と書画文墨趣味ネットワーク」（『書論』第45号 2019.12.30 書論研究会）、「ボストン美術館所蔵岡倉天心旧蔵漢籍について」（『人間生活文化研究』NO.30 2020.2.10 大妻女子大学人間生活文化研究所）、「長尾雨山と徐園集」（『書論』第46号 2020.10.10 書論研究会）、「長尾雨山と六三園」（『大妻女子大学紀要-文系-』第53号 2021.3.12 大妻女子大学）がある。

[注2] [注1]で紹介した拙稿「長尾雨山が上海で参加した詩会について」および同「長尾雨山と徐園集」で論じた。

[注3] 呉孟晋『長尾雨山の中国書画受容に関する基礎的研究』（平成27-29年度科学研究費助成事業 若手研究(B) 研究成果報告書 2018.3.30 京都国立博物館）参照。

[注4] 『東方早報』初出『人民協網』王秀中「日本画壇：近代中国美術的中介和老師」2016.11.30UP <http://www.rmzxb.com.cn/c/2016-11-30/1182168.shtml> 2021/10/17（プリントアウトの日付、以下

同)

[註5] 六三亭および六三園と白石六三郎については、前出の拙著『呉昌碩研究』、同『呉昌碩と日本人』等で論じた。また、拙稿「六三園逸聞」(『大妻国文』第28号 1997.3.15 大妻女子大学国文学会)で、六三園に関する逸聞を紹介した。

[註6] 坂田敏雄「上海邦人医界明治年史」(『上海研究』第1輯 1942.2 上海歴史地理研究会)、東京帝国大学編『東京帝国大学卒業生氏名録』

(1926.4.30 東京帝国大学)、『医学公論』第348号(1919.9.12 医学公論社)等、柴田誠氏提供資料による。

[註7] 拙稿「長尾雨山が上海で参加した詩会について」(『日本中国学会報』第66集 2014.10.11 日本中国学会)、同「長尾雨山と徐園集」(『書論』

第46号 2020.10.10 書論研究会)で論じた。

#### 付記

資料をご提供くださった長尾家と前京都国立博物館学芸部調査国際連携室室長、現京都大学人文科学研究所准教授・呉孟晋氏、また、佐々木蘇江に関してご教示をいただいた柴田誠氏に深く感謝申し上げます。

本研究は、令和二年度大妻女子大学戦略的個人研究費「長尾雨山「書画文墨趣味ネットワーク」研究」(課題番号:S20506 研究代表者:松村茂樹)による成果の一部です。

#### Abstract

Uzan Nagao (1864-1942), a modern Han scholar, stayed in Shanghai, China for 12 years from December 1903 to December 1914. He interacted with Shanghai literati and made many contributions culturally and socially. One of them is holding the old painting and calligraphy exhibitions, which is covered in this article.

Uzan founded the exhibition, which was the first exhibition of old painting and calligraphy in China. After the third exhibition, he contributed to add Chinese scholars of his choice to the founders with his excellent network formation ability.

(受付日:2021年11月17日, 受理日:2022年3月30日)



松村 茂樹(まつむら しげき)

現職:大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授

筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科中退 博士(文学, 筑波大学)。専門は中国文化論, アジア太平洋国際交流論。2015年4月より2016年3月まで, ボストン大学客員研究員として, 米国ボストンに滞在。ボストン大学アジア研究センターで発表するなどして, 日中米文化交流研究を進めた。

主な著書: 書と画を論じる(単著, 研文出版) 呉昌碩と日本人(単著, Otsuma eBook 大妻女子大学人間生活文化研究所) 書を考える- 書の本質とは(単著, 二玄社) 呉昌碩研究(単著, 研文出版) 呉昌碩談論- 文人と芸術家の間- (単編, 柳原出版) 書を探る- 王羲之から書教育まで(単著, アートダイジェスト) 近代中国の文化人と書(単著, 研文出版) 鄭板橋(共著, 芸術新聞社) 傅山(共著, 芸術新聞社) 遺老が語る故宮博物院(共訳, 二玄社) 言語文化 [文部科学省検定済教科書高等学校国語科用] (共著, 文英堂)